私と彼の恋物語

byとろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私と彼の恋物語

【Ｎコード】
Ｎ６４４１Ｘ

【作者名】
ｂｙとろ

【あらすじ】
私、シャルル・ロードライトは恋をしました。
その相手は――――一日中眠ってる、怠惰で落ちこぼれな少年！？
晴れて恋人同士になった私たち。
実は世界最強な彼と、私の恋の物語。
魔法もあるよ。アレなシーンは無いけどな！
良かったら見てやってください。

プロローグ（前書き）

俺の言いたいことは唯一つ

『爆ぜろ、リア充！』

そんな小説です。

プロローグ

「『世界最強の存在（ファースト・オリジン）』とは、我々、魔法を扱えるものにとって、最高の名誉であり憧れの称号です。
これは下からD，C，B，A，S（アイン），SS（ツヴァイ），SSS（ドライ）とあるランクとは別であり、実力はドライでさえ遠く及ばないといわれています。
現在、『世界最強の存在（ファースト・オリジン）』は五人いますが、公式に確認されているのは、

『紅星を背負う物（クロス・プロメテウス）』
イグニ・リヒャルド

『凍てつく氷燐（ブレイジング・スケイル）』
アリシア・ディ・アーシア

『慈悲深き光輪（シャナ・シャイニング）』
レナ・フォンカルド

この三方だけでおり、レナ・フォンカルド様は我が『スティティイレ魔法学校』の生徒会長を務めています。

この三方以外の二方は二つ名だけ確認されており、

『心優しき狂戦士（カインジーク・バーサーカー）』

『姿無き黒幕（インビシブル・フィクサー）』

と、呼ばれています」

私―――シャルル・ロードライトは席を立ち、そういうとまた席に座った。

「おぉ、さすが主席だ。細かいところまで良く憶えていたな。まぁ、テストでこんなこと出ないし、憶える必要ないけどな」

チャールド先生の言葉を受けて、「ですよねー」と声が上がる。

スティテイレ魔法学校に入学してから3週間がたった。

スティテイレ魔法学校

魔法界最高の魔道師養成機関。

3年間のカリキュラムで卒業生は最低でもランクBはいく超優秀校。

しかし、その実校風は自由。

可能性を開花してこそ、魔道は鍛えられる。

その教育方針で今までやってこれたのだから尊敬できる。

しかし、そう、自由なのだ。

自由なのだが流石にあれはどうにかした方がいいと思う。

私はちらと教室の窓側の席で寝ている男子を見た。

ヴァン・エイジトール

髪と目が青く澄んでいる少年。

彼はとにかく寝ている。

起きているのはごはんの時だけなんじゃないか？もしかしたらごはんを食べている時も寝ているのかもしれない。

そんな風に思ってしまうほどに彼の起きている姿を見たことが無い。

キーンコーン

「ん？おっと終了か。よし起立、礼。解散していいぞ」

チャールド先生はそういうと教室から出て行った。

「シャルゥ、遊びにいこー」

「ひゃっ、もう、止めてっていってるでしょ。リンちゃん」

活発そうな少女――――リン・ルゥが終了と同時に跳びかかってきたのだ。

「ごみんに？・・・また見てたねぇ、彼のこと」

「ふぇ！？な、何言ってるの！？」

「まぁ、彼、顔はいいしねぇ。きをつけなよ？意外と人気あるよ？彼」

「だ、だから、違うってば！」

「んん・・・」

彼がそう呻き、なんと起きたのだ。

もう、教室には私たち3人しかいなかった。

「え、えっと・・・」

「よう、ちみ。お目覚めいかが？」

「・・・？ああ、君は確か主席の・・・？」

「あ、は、はひ」

思わず噛んでしまった。恥ずかしい。顔が赤くなっているのがわかる。

「大丈夫？」

そう、微笑んだ彼の姿は印象的で、また、ぼっと顔が熱くなった。

「フッフ～ん・・・その子は、シャルル・ロードライト。私がリン・ルゥ。よろしく」

「俺はヴァン・エイジトール」

「ねぇ、これから遊びに行かない？」

「リ、リンちゃん！？」

「いや、悪いが用があるから。また誘ってくれるかい？」

「もっちろん。それじゃ」

「ありがとう。さよなら」

そういって私たちは分かれました。

あのあと、リンちゃんに迫られいびられ続けた。今は私の部屋でベッドに横になっている。

彼の顔を思い出すたび、顔が熱くなる。でも、嫌じゃない。

分かってる。

そう、これはきっと———

恋、なのだ。

プロローグ（後書き）

何かつくチャッタ。
更新する予定は無いようなあるような・・・
たまに更新します。

日常（前書き）

肩の力を抜いて、主人公に呪いの言葉をかけてあげてください。
そんな感じの１話目です。

日常

もう、3月だというのに2人しかいない教室の窓の外にはひらひらと雪が舞っている。

「俺は・・・化物だ」

そう言い切り、目を伏せる。

怖いのだ。

自分が化物と知って彼女はどう反応するだろうか？

恐怖するか？

侮蔑するか？

「・・・そんなことどうでもいいじゃないですか」

程なくして彼女が言った言葉に俺は目を見開いた。

受け入れてくれるというのか？俺を？自分のような化物を。

彼女は優しく微笑み――――

そして彼女が続けて言った言葉に、俺は体からあふれる思いを止められなかった。

「――――好きです。初めて会ったときからずっと、あなたのことが好きでした」

温かい物が俺の頬を伝う。

「・・・俺も・・・ずっと君のことが――――」

窓の外を降る雪だけが、重なる影を見守っていた。

――

「――――ください・・・きてください・・・起きてください」

俺――――ヴァン・エイジトールは体を揺さぶられる感覚とともに目を覚ました。

「シャル・・・朝からなんて大胆だな・・・？」

「ふぇ！？・・・な、なにいってるんですか！」

俺の彼女、シャルル・ロードライトだ。

付き合いだしたのは1ヶ月前だ。

俺が朝が弱いことを昨日伝えたから、今日が新学期ということもあって、起こしにきてくれたのだろう。

本当に良くできた子だ。からかうと面白いしな。

そんな事を考えながらベッドから起き上がる。

ここは、俺等が通っているスティティイレ魔法学校の寮だ。

・・・あれ？女子って入っていいんだっけ？一応男子寮だよな、ここ？

「許可はとってあります。ヴァン君を起こしにいくって言ったら快く許可してくださいましたよ？」

疑問が顔に出ていたのだろう。シャルはそう答えた後、リビングの方に向かっていった。

「あの寮母（クソばばあ）め・・・」

そう、毒づいた後、シャルに起こしてもらえたということで許すことにした。

ヴァン・エイジトールは落ちこぼれだ。

魔法はろくに使えない。態度は悪い、というか一日寝てる。

そんな彼が曲がりなりにも進級して2年生になれたのは、校長が俺の素性を知っているからだろう。

『世界最強の存在（ファースト・オリジン）』

その中の素性の公開はされていない2人の内の1人。

『心優しき狂戦士（カインジーク・バーサーカー）』

それが俺だ。

シャルはそれを知っていて、それでも変わらず接してくれている。
どれだけ俺がシャルに救われているか、それを彼女は分かっていない。

しかし、と彼は思う。

起こしてくれたときのシャルを思い出す。

金色の髪に、朝日を受けて輝く青色の瞳。
少し幼さが残る顔に、反面、出るところは出て、引っ込むところは引っ込んでいる。
学年主席ということもあいまって、学校のアイドルとよばれ、ファンクラブさえ作られている。

そんな子が俺の彼女なのだ。
男として冥利に尽きる。

そんな事を考えながら制服に着替え、リビングに出る。

テーブルの上に並べられた朝食を見て、幸せを感じるヴァンであった。

「同じクラスですね！」

「おう、そうだな」

とても嬉しそうな顔をするシャル。

クラス分けの紙が張り出された掲示板の前だ。

一緒に登校してきたので、とても目立った。
シャルは前述のとおり、学校のアイドル的存在。それに対し俺は、ある意味で有名な落ちこぼれ。
そんな2人が歩いていれば、目立って仕方ないという物だ。

人が集まっているところは苦手だ、シャルもそれが分かっているのですぐにクラスの方へ向かう。

2ーCの教室に入ると、見知った顔がいくつかあった。

「あ、おはよー。シャルゥ、久しぶり！元気にしてた？」

「わぁ、リンちゃん！同じクラスだったんだね！」

「ナンダそれー？ひどいなぁ・・・あっ！」

何か思いついたように顔を輝かせると、途端にニヤニヤし始めた。

「そっかー、仕方ないよねぇ、愛しの彼と同じクラスってことで舞い上がっちゃってたんだもんねぇ～」

「あ、あぅぅ・・・」

「うわっ・・・まじで図星なの・・・？まさか冬休み中にそんな関係になったの？」

「ああ、まぁな」

俺が臆面も無くそう言い放つと、シャルの顔がぼっと音を立てて赤くなった。

それを見たリンが真面目な顔をしてこちらを向く。

「シャルルを泣かせたら・・・許さないよ？」

「フッ・・・まかせろ」

「ふふっ・・・いやぁ、そっかー、あのシャルゥがねぇ・・・まぁ、いいや。んじゃ、これからよろしく」

「おう、よろしく」

「は、はい、よろしくね」

まだ顔が赤いが、シャルも返事をする。

黒板に書いてあった席順にしたがって自分の席に着くと、隣はシャルだった。

窓辺の席だし、隣はシャルだし、最近ついてるな。

そんな事を考えながら、俺は闇に意識を落とした。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

男はさっきの会話を聞いていた。

「う、うそだろ・・・？そ、そうだ嘘に決まってる・・・ロードライトさんと、あんなクズが付き合ってるなんて・・・」

困惑していた男はやがて、冷静になり、それと同時にさっきのが嘘ではないと悟る。

「くそっ！くそっ！・・・あんなクズが、クズが・・・・・・いや・・・そうか・・・あのクズがロードライトさんの弱みを握っていて・・・クズめ・・・ふふ、待っていてください・・・すぐに開放してあげるよ・・・ロードライトさん・・・」

日常（後書き）

最後のキモイやつが何故か活き活きかけた・・・。
なぜだ・・・？

変化の兆し（前書き）

一日に2本上げるとか・・・
つらい・・・
ヘルメットが無ければ死んでいたな。

そんな感じの2話目です。

変化の兆し

「見られてる気がする？」

1週間ほど経ち、今、私は最近気になってることをヴァン君に相談していました。

今日の授業も終わり教室には私たちしか居ず、視線も感じず、聞かれる心配も無くそれなら、と打ち明けてみたのです。

「はい・・・ここ1週間ぐらいずっと・・・」

「・・・・・・」

「で、でも、家に帰ると視線も消えるので・・・心配・・・ないと・・・」

最後のほうは、小さくなってしまいました。

大丈夫なわけがありません。ずっと、怖くて怖くて、唯一ヴァン君の側だけが安心できました。

それなのに、最近はヴァン君の側に居ても視線を感じるようになりました。

「・・・シャル、いいんだ・・・」

「・・・う、うぅ・・・ヴァ、ン君・・・うぅぅ・・・」

その言葉を聞いて私は思わず泣いてしまいました。

そして彼は優しく私を抱きしめてくれました。

「・・・聞いてくれ、シャル」

顔を上げると、彼の顔は憤怒に歪んでいました。

「ヴァン君・・・？」

「俺はそいつをどうにかしないと気が済まない・・・」

その言葉で理解します。

「でも、それだと・・・」

「力のことは大丈夫だ・・・抑えろとは言われていないからな」

それに、と彼は続けました。

「自分の彼女のことを気づけなかった俺にも腹が立つ」

「ち、ちがいます！・・・ヴァン君のせいじゃ・・・」

「それでも、だ。俺の気が済まない・・・なぁに、俺はシャルがいれば何もいらない」

「ヴァン君・・・」

翌日

俺は早速行動を開始しようとしたのだが、その必要は無かった。

なぜなら、本人が会いに来たからである。

「僕が来たからにはもう大丈夫ですよ・・・ロードライトさん」

学校にきたらコイツが待ち構えていたのだ。校門で。

顔はいいほうだろう。

一応、魔力も一般的に見れば多いほうだろう。無駄がありすぎるが・・・。

「なんだてめぇ・・・？」

「ハッ、このクズが！ロードライトさんを脅してつき合わせるなんてとんだ下衆野郎だな」

「「・・・は？」」

俺とシャルの声が重なる。

「ね、ねぇ、どういうこと？」

隣にいたリンが聞いてくるが、俺にも分からん・・・。

「とぼけるな！おまえがロードライトさんを脅してつき合わせている事なんかお見通しだ！・・・ああ、ロードライトさん待っててください。今、このボク、テッラ・ダリウスがあなたを解放させてさしあげます」

名前を聞いた瞬間、リンが眼を見開く。

「う、うそ・・・」

「どうした？知り合いか・・・？」

「知らないの！？・・・いや、ヴァン君だしね・・・」

あきれた様に、ため息を吐かれた。

「ふんっ！この僕を知らないなんて、さすがバカだな！」

うぜぇなコイツ・・・

「ぼくこそ、５大公爵家の一つダリウス家の長男！テッラ・ダリウスだ！」

どうだといわんばかりに人差し指を突きつけてきた。

うぜぇぇぇぇ・・・・

「・・・で、そのバッテラ君が何のよう？」

「テッラだ！やっぱりゴミだな貴様は、どうしてこんなヤツがこの学校にはいってこれたんだ？」

「・・・早く教室に行きたいんだが？」

「ふんっ！・・・ボクは貴様に『決闘』を申し込む！」

「決闘・・・？」

「そんなこともしらんのかっ！さすが落ちこぼれのクズだな」

さっきから俺の後ろにいるシャルさんから途轍もない殺気を感じるんだが・・・？

いや・・・俺のために怒ってくれるのは嬉しいけど、やばくね？

「で、決闘って？」

あきれた様にリンが丁寧に教えてくれた。

この学校の風変わりな校則の一つ。

生徒間でのいざこざがあった場合、この決闘で勝利したほうがことを進めることができる。

もちろん、いざこざが無くても、歓迎として決闘をやることも許可されている。

「・・・めんどくせぇな、俺パス」

「んなぁ！・・・フン、やはり勝てなくて怖いか？」

「・・・シャル？」

シャルが俺の制服の袖を引っ張っていた。

何かと思い尋ねてみる。

「あ、あの人です・・・あの人の視線が・・・」

そういって俯いてしまった。

だが、理解する。

コイツか・・・コイツが・・・シャルを・・・！

「いや、気が変わった。受けてやるよ、決闘」

「ほう、まぁいい・・・僕が勝ったらロードライトさんを開放してもらうぞ！」

俺はもうそんな言葉を聞いていなかった。

決闘は、翌日に行われた。

そして変な噂が流れているのか、休みの日ということもあり、沢山の生徒が決闘を見に来ていた。

「ふん、逃げずにきたのは褒めてやる」

「御託はいい・・・いっとくが手加減できない・・・」

「あははは！落ちこぼれがボクに何をしようっていうんだい？」

そんな事を話していると、開始の時が迫ってきた。

『それでは両者前へ・・・それでは、開始！』

アナウンスがそう告げて決闘が始まった。

―――――――――――――――――――――――――――――――

「むりだわ・・・」

私―――現生徒会長、ティナ・フラットはそう呟いた。

決闘は生徒会が強制的に運営するようになっている。

生徒会長である彼女は強制的に見なくてはならない。

生徒情報は調べた。

あのダリウス家の長男

テッラ・ダリウス

高慢だが魔法技術に関しては確かな物だ。

そして、『落ちこぼれ』

ヴァン・エイジトール

彼に関しては何も分からなかった。

だが、『落ちこぼれ』の名は聞いたことがある。

魔法がろくに使えない、校長の権限で特別に入学した生徒。

勝てるわけがない。

テッラは主席とまではいかないが優秀なのだ。落ちこぼれが勝てるわけが無い。

そんな彼女の思いは、すぐに覆されることになる。

――――――――――――――――――――――――――――――――

決闘が始まった瞬間

「すぐに終わらせてやる――――『ファイアー』」

テッラが魔法を唱え火を打ち出してくる。

ヴァンはよけない。

ボァァ！

火はヴァンを直撃しはじける。

「はっ、やはりクズだった・・・・」

「おいおい、こんなんじゃ虫も殺せないぜ？」

火が晴れたそこには無傷のヴァンが立っていた。

「ふざけるな・・・！！・・・このくずがぁぁ！――――『バーニング』！！」

ゴオオオオオオオオ！！

特大の炎がヴァンを襲う。

しかし――――

「手加減はできないって言ったよな」

瞬間、ヴァンは消え、気づいたときにはテッラの後ろに立っていた。

「えっ・・・！？」

ヴァンはテッラの首筋を手刀で叩き気絶させた。

『・・・・・・！！し、勝者、ヴァン・エイジトール！！』

「やれやれ、やっぱり手加減しちまった」

一瞬遅れて歓声が沸いた。

変化の兆し（後書き）

同時執筆ってきつっぅ

感想待ってます！

急変（前書き）

これのほかに、もう一作、同時執筆しているのですが、設定が混ざってしまうことがあります。
極力修正しますが、意味不明になったらごめんなさい。

そんな感じの３話目です。

急変

運営側―――つまり生徒会用の特別観賞席にいた私は、思わず椅子を倒すほどの勢いで立ち上がっていた。

今の試合を見て驚くな、という方が無理だろう。

他の生徒会役員の皆も驚愕が目に見えて分かる。

いつも冷静沈着な副会長、ファーブ・ザナード君も驚きを隠せないでいる。

『・・・・・・！！し、勝者、ヴァン・エイジトール！！』

1分ほどの間を空けて、ようやくアナウンスがはいる。

それと同時に我にかえった観客達の歓声が野戦場を支配する。

私もようやく我にかえり、ファーブ君に尋ねる。

「最後の一撃・・・見えた？」

「・・・いえ・・・会長は？」

「無理よ・・・」

生徒会長というのは、スティティイレ魔法学校という名門にはいった者をまとめあげる、圧倒的なカリスマと強さが求められる。

つまりそれは学校最強ということ。

あの『慈悲深き光輪（シャナ・シャイニング）』が生徒会長だった去年は、トラブルなど1つも起きなかったというのに、新年度早々問題を起こされては自信が無くなるというものだ。

話が逸れたが、その学校最強と優秀な生徒が集まる、生徒会の誰にも捕らえられない速さで動いた。

あの『落ちこぼれ』が、だ。

実力を隠していたのか、何らかのトラップか――

いずれにしても、関係は無い。

本気でやれば負けるとは思わない。

使えるものは使う。

それがなんであろうと――

――――――――――――――――――――――――――――――

観客の歓声が続いている中、倒れた――――て・・・てな・・・そう、バッテラ君が担架で運ばれていくのを尻目に野戦場を後にする。

野戦場の入り口には、シャルが待っていてくれた。

すぐに駆け寄り、抱きしめる。人がいないのを確認済みだ。

「は、はわっ・・・！ヴ、ヴァン君！あう・・・」
顔を赤くしながら素直に受け入れてくれる。ああ、マジかわいい・・・。
「もう、大丈夫だから」
「はい・・・」
「もう、怖くない・・・だろ？」
「はい・・・」
そうしてもう一度ぎゅっと、優しく力を入れる。
そして、シャルを開放する。
「ん、もう・・・場所を考えてください・・・」
「人なんかいないよ？」
「そういうことでは・・・はぁ、もういいです」
「・・・？ありがと？」
「でもこれからどうするんですか？私としては、もうヴァン君が『落ちこぼれ』なんて呼ばれなくなると思うのでいいんですが・・・」
「なら、いいよ―――シャルが側にいてくれるなら」

「はぅ・・・ず、ずるいです」

また顔を赤くしてうつむくシャル。かわいいなぁ、もう。

そんな会話が後3回ぐらい続くのであった。

――――――――――――――――――――――――――――――――

それは、決闘の次の日の昼時だった。

ピンポンパンポーン

『2－C、ヴァン・エイジトール君。至急生徒会室に来てください。繰り返します――――』

その放送を聴いたとき、何故か悪寒がした。

「うわー・・・まぁ、ガンバ？」

リンが励ましてくれる。ああ、ありがと――――

「退学になっても、一応友達だよ？私たち」

「なんで、退学って決まってんの！？」

前言撤回。こいつは死ねばいい。

「そ、そんな・・・ヴァン君が・・・」

「シャル、そんな事にはならないから！？」

「うううぅ・・・ヴァン君がいないと、私ぃ・・・・」

ああ、シャルが涙目に・・・・。そんなシャルもかわいいよっ！・・・・って違う！

「そんなこと無いと思うけど、とりあえず行ってくるわ・・・・」

「おう、ガンバ！・・・・シャルゥ、大丈夫だって」

ああ、心配だ・・・・。

というわけで、生徒会室の前に俺は来た。

すぅ、と深呼吸して心を落ち着け、腹をくくる。

コンコン

「失礼しまーす」

「いらっしゃい」

ドアを開けると、1人の女性がいた。

制服のリボンの色が緑、ということは3年生だ。

この学校は、1年が赤、2年が青、3年が緑、という風にそれぞれ決まっている。

「えーと・・・」

「まぁ、とりあえず、そこに座って」

と、指定されたソファに腰掛ける。

「とりあえず、生徒会長のティナ・フラットよ。よろしく」

「はぁ、ヴァン・エイジトールです」

「ええ、しかし、昨日の試合は驚いたわ。まさか、あのダリウス家の長男に勝つなんてね」

「あの、そんな話なら俺、帰りますけど・・・」

「ああ、ごめんなさい・・・なら、本題に入ろうかしら」

自然と背筋が伸びた。まさか、本当に退学な分けないよな・・・？

「あなた、生徒会役員になりなさい」

「・・・・・・は？」

いま、こいつはなんと言った？生徒会役員だと？
そんなめんどくさそうな事やってられっかよ。
ちゃっちゃと断って―――

「言っとくけどあなたに拒否権は無いわ」

「んなっ・・・」

頭イってんのか？コイツ・・・？

そんな事を思ったときだった。

バンッ！

勢いよく生徒会室のドアが開いた。

「私は反対です！」

そんな事を言いながら出てきたのは、がたいのいい赤い髪をした男だった。どうやら二年生のようだ。

「どういうこと？ダート君？」

「ですから！こんなやつを生徒会に入れるなんて私は反対です！」

いや、俺はいらねぇし・・・。

そんな事を思っている俺の前でドンドン話が進んでいく。

「それでは、あなたと彼、勝負しなさい」

「・・・は？」

呆気にとられる俺。どうやらダートと呼ばれたやつも呆気にとられ

た様子だ。

「彼が勝ったら、彼は生徒会へはいる。ダート君あなたが勝ったら、どうとでもしなさい」

「・・・っ！わかりました！」

「いや、俺に選択権は・・・？」

「ないわよ」

さも、当然といった風にいってくる生徒会長。

そして側に来て耳打ちした。

（彼女、シャルル・ロードライトさんだったかしら・・・？）

俺は目を見開く。

「・・・てめぇ」

「ふふ、異論は無いわね？それでは一週間後、第一野戦場で」

そういって、生徒会長は怪しく微笑んだ。

急変（後書き）

シャル、可愛いよ、シャルル。
ヴァンはシャルルのことをシャルと呼んでいます。
ヴァン視点でシャルと出てきたら脱字ではありませんのでご注意を。

感想待ってます。

狂剣の片鱗（前書き）

戦闘描写難しい・・・。
まぁ、戦闘って言うほど戦闘ではないんですけどね。
序盤、主人公は敵を瞬殺が基本なのでサックサク進みます。

そんな感じの４話目です。

狂剣の片鱗

俺が生徒会室から帰るとシャルが待っていてくれた。

「・・・大丈夫？ヴァン君・・・？」

心配そうに俺の顔を覗き込んでくるシャル。

シャル・・・。

すまない。これだけはおまえには言えないんだ。

心配にさせたくない。

ただでさえ、ストーカーに遭っていたという　のに。

これ以上おまえが心配することなんて無い。だから――

「ああ・・・大丈夫だよ、シャル」

嘘をつく俺を許してくれ。シャル・・　・。

――――――――――――――――――――――――――――

生徒会室から戻ってきたヴァン君は静かに、けれどこれ異常ないくらいに怒っていました。

心配になった私は思わず訊いてしまいました。

大丈夫？、と――

彼は辛そうな顔で、大丈夫だ、と答えてくれました。

しかし、私の不安はぬぐえません。

答えた時の彼の顔が、憤怒に、苦しみに、悔いに、そしてほんの少しの悲しみに歪んでいたから。

私の不安は、ドンドン膨らんでいきました。

嫌な予感がする――――

その予感は、きっと正しかった。

それなのに私は、彼を止めてあげられなかった。

――

一週間後

俺は生徒会長の指定した第一野戦場に来ていた。

「・・・来たわね」

フィールドに出ると生徒会長と戦闘相手のダートが立っていた。観戦席には生徒会役員と思しき奴等がいた。

「逃げずにきたことは褒めてやる・・・だが、俺はテッラのような

バカではないぞ？」

「・・・・・・」

俺は無言だった。

「・・・怖気づいたか。やはりコイツなんかに生徒会に入る資格はないですよ。会長？」

「・・・・・・」

俺はそれでも無言だった。

「フフッ、さぁ、始めましょうか」

「くっ・・・」

ダートは苦虫を噛んだような顔で初期位置へと歩いていく。

「・・・手加減はせんぞ」

「・・・・・・」

無言を貫き通す。

「それでは・・・開始！！」

生徒会長がそういった瞬間――――

勝負は決した。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「ヴァン君ー。起きてくださーい・・・」

いつものようにヴァン君を起こしにいくともう部屋はもぬけの殻だった。

今は朝の6時。休日なのに早すぎる、と彼は言うが、こっちとしては一秒も早くヴァン君にあいたいのだ。

彼もそれが分かっているから、文句を言った後、すぐに許してくれる。

ヴァン君は私が起こしているから起きているのであって、自分からこの時間に起きるなんてありえない。

1週間前から感じていた嫌な予感が私を急かす。

急げ、急がないと取り返しのつかないことになる――――

私は急いで部屋を出ました。

「ヴァン君・・・」

ただの私の早とちりであって欲しい。

そう、願わずにはいられませんでした。

――――――――――――――――――――

何が起こっているというの・・・？

観戦しに来ていた役員の皆も野戦場に降りてきて警戒している。

一瞬だった。

私が開始を告げた瞬間、爆発でも起きたのかというほどの音をたて

野戦場の３分の一が吹き飛んだ。

ゆっくりと砂埃が晴れていく。

そこにいたのは、ぼろぼろになって地面に突っ伏しているダート君と、それを見下すかのように立っているヴァン・エイジトールだった。

ヴァン・エイジトールがこちらを振り返り、私はぞっとした。

感情などどこにもない、否、瞳の底で他の感情を燃やしながら静かに燃える憤怒がこちらを捉えていた。

ヴァン・エイジトールが一歩こちらに向かって踏み出す。

われに返り、役員は私を守るように展開した。

「ま、まちなさい・・・！？これ以上近づけばあの子が―――」

「調子に乗るなよ、小娘・・・」

底冷えするほど冷たい声。

それが自分たちに向けられている。

恐怖が目の前にあるとき、人間がとる行動は決まっている。

恐怖の対象を、無くすこと。

体は勝手に動いていた。

役員の皆も、自分の持てる最高の技を放っていた。

１０にも及ぶ大魔法は対象を無残に食いちぎる、はずだった。

パりイイィィィィン！！！

彼の右腕に銀の篭手が出現し、私たちの魔法を握りつぶした。

呆然とする私たちの前で、彼の篭手の、手の甲に一つ、腕に二つある光のない宝玉が順に紫色に光りだす。

それと同時に、腕の周りに３個の拳大の紫色の高魔力体が出現する。

意識が途切れる瞬間見たのは誰かの背中だった。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「調子に乗るなよ、小娘・・・」

俺がそういった後、生徒会の奴等は魔法を放ってきた。

怒りで自身を制御できていない俺は流れのままに、魔法『戦機召喚(セットアップ)』を発動した。

この『戦機召喚(セットアップ)』こそが俺の唯一の魔法。

別次元に収納してある物を取り出す、という魔法だ。

俺は、一瞬で『三位の篭手(トリニティ・ギア)』を装備して、迫り来る魔法を握り潰した。

そして拳に魔力をこめる。

『三位の篭手(トリニティ・ギア)』

魔力を込めることによって、最大3個の高魔力体を出現させる。

この魔力体は、対象を殴ることによって、一瞬遅れて対象に発射され、自動的に追い討ちをかけることができる。

俺は右腕を何の躊躇いもなく振り抜いた。

生徒会の奴等は拳の圧力と、魔力球によって見るも無残な姿に成り果てる。

ハズだった。

それは一人の少女の眼前で止まっていた。

一瞬遅れて剛風が巻き上がる。
少女は瞬き一つせず、それを見据えていた。
「・・・どういうつもりだ？シャル・・・」
「・・・っ！！」
パチン、と―――
乾いた音が野戦場に響いた。
頬を引っ叩かれたと気付くのに少し時間がかかった。
「目は、覚めましたか？」
「・・・・・・はぁ」
ため息をつく俺に、シャルはやっと微笑んでくれた。
「また、やっちまったのか・・・」
そうつぶやく俺にシャルはがばっと抱きついてきた。
「どうして、とは聞きません・・・ですが、心配したんですよ？」
「シャル・・・」
「本当に、心配したんです・・・」

「ああ・・・悪いな・・・」

シャルの髪を撫でてやる。

―――何分そうしただろうか。

やっと落ち着いたシャルが生徒会の奴等を起こしていく。

「・・・うぅ」

最初に目が覚めたのは生徒会長だった。

「よう・・・」

「・・・っ！！」

起きた瞬間身構える。

「まぁ、まて・・・全員起きてからだ」

１０分ほどで全員が起きた。

起きた瞬間俺を見て身構える、ということを全員がやった。なかなか面白いが、何か傷つくぞ・・・。

「さて・・・さっきは済まなかったな」

「あなた一体何者なの・・・？」

「それは気にするな」

「「「「「えええー」」」」」

「言っとくがお前等がシャルにしようとしたことを俺は許したわけじゃあない」

その一言で固まる生徒会。

「それについては謝らせてもらうわ・・・ごめんなさい」

「やけに素直だな・・・」

「もともと本気でやるつもりはなかったのよ。ただ、あなたを闘わせるにはこうするしかないと思っただけなの」

「なんで俺なんかを生徒会に入れようと思ったんだ?」

「強いからよ」

「強いからって入れるわけじゃないだろ」

「ホントの事よ・・・力が必要なのよ」

「なに・・・?」

「この学校に危機が迫っているわ」

狂剣の片鱗（後書き）

一週間交替で小説を書いていきたいと思います。
続きは来週からということになります。

感想・指摘あればバッシバシください。

幕開け（前書き）

何か凄い色々な人に見てもらえているようです。

ありがとうございます。

皆様のご期待に応えられるように、頑張って生きたいと思います。

そんな感じの５話目です。

幕開け

「この学校に危機が迫っているわ」

「なに・・・？」

「実は、校外、それもすぐ近くで最近赤いバンダナをしたグループを見かけた、ということが増えてるの」

「赤いバンダナ・・・？」

「ええ・・・その情報が初めて入ったのが1ヶ月前。そして、その頃から学校に変な魔力が漂い始めたわ」

「それが学校の危機？」

「原因の一つではあるわ」

「他にもあるんですか？」

小首を傾げるシャル。かわいいなぁ。

「ちゃんと訊いててくださいね。ヴァン君？」

「お、おう・・・」

「いいかしら・・・？」

「あ、はい」

「確認された情報を元に検証し、校長とも話し合った結果、確認された奴等は『ブローカー』ということが分かったわ」

「『ブローカー』・・・・！！」

息を呑むシャル。しかし、俺にはさっぱりだ。

「『ブローカー』ってなんだ？」

「え・・・？あなた知らないの・・・？」

生徒会の役員共も「なに言ってんだこいつ」みたいな視線を浴びせてくる。

「ヴァン君、『ブローカー』っていうのは最近この近辺の町を騒がせている盗賊だよ」

「へぇ、そうなのか」

「シャルルさん、こんなヤツが彼氏でいいの？」

む、失礼だなコイツ。

「普段は疎いですけどいざって言うときにはとても頼りになりますよ」

「・・・幸せものねぇ。あなた、彼女大切にしなさいよ？」

「いわれなくても分かってる」

何を当然のことを言ってるんだ、といわんばかりの視線を返してやる。

「・・・はぁ。話が逸れたわね。その『ブローカー』がこの学園を標的にしていることが分かったの」

「それが・・・？」

「ええ、この学校に迫っている危機よ」

「・・・しかしなぁ、それなら警備を強化するとか、やりようがあるだろ？」

「そんなものとっくにやったわよ。けど『ブローカー』の一番やっかいなとこがその隠密行動にあるのよ」

「隠密行動ねぇ・・・」

「ええ、組織の組員が推定５０人。その約半分がＢランクで、そいつ等が独自に開発した隠密の魔符が厄介なのよ」

「めんどくせぇな・・・」

「そうなのよ。だから、とりあえず明日からあなたに夜の警備を頼むわ」

「・・・まて。何故俺が手伝うことになっている？」

「そりゃぁ、試合に勝ったし、話をここまで聞いたんならねぇ？」

「ああ、実力がどうとか言っていた自分が恥ずかしいな」
ダート君まで！？
「しかs「いいですよ」っシャル！？」
「ヴァン君。よく考えてください」
「な、何だ・・・？」
「想像してください。私がその盗賊たちに捕らえられてしまうところを」
「え・・・？」
「そして、その盗賊たちにムリヤリ・・・」
「よし、生徒会長。明日からの学校の平和は俺に任せろ！」
「「「「「いい、顔してるな、おい！」」」」」
生徒会の奴等が驚愕していたが関係はない。
「許さねぇ・・・毛も残さずぶっ飛ばしてやる・・・！！」
額に青筋を立てながら、俺はこれ異常ないほどに怒っていた。
俺の、俺のシャルを・・・！！許さん！！！

「あ、でも二つ条件をのんでもらいたいんです」

「なにかしら・・・？」

「えっと、私も生徒会に入れてください」

「あら、どっちみちあなたも入れるつもりだったのよ？彼の監視として」

「あれ？そうだったんですか」

「ええ。さて、一つ目はオッケーよ。二つ目は？」

「ヴァン君の詮索をしない、ということです」

「そ、それは・・・」

まぁ、自分たちをいとも簡単にねじ伏せたやつのことを詮索するなっていうのは酷だな。

俺が、『心優しき狂戦士（カインジーク・バーサーカー）』っていうことをばらす訳にもいかんしな。仕方ない。

「・・・わかったわ。その条件を飲みましょう」

「ありがとうございます。それではこれからよろしくお願いします」

「ええ、こちらこそ。・・・しかし、本当に良くできた彼女ね」

「いいだろう？」

「ええ、本当。私に頂戴？」

「はっは。・・・殺すぞ？」

ちょっと調子に乗ってるから、殺気を向けてやった。

「・・・や、やっぱり遠慮しとくわ・・・」

ははは、真っ青になってやがる。ざまぁみろ。

「と、とりあえず、今日はもう遅いのでここで解散にしましょう？」

「あら、もう４時？そうね、それではこれで解散しましょう」

「んじゃ」

「ああ、エイジトール君？明日７時半に生徒会室に来るように」

「へいへーい」

俺は気楽に手を振りながら、寮に向かって歩き出した。

―――――――――――――――――――――――――――――――

「はぁ、めんどくさいことになってきたなぁ」

そういってヴァン君はベッドに腰掛けました。

「・・・・・・」

「ん？どうした、シャル」

「・・・です」

「え？」

「バカです・・・ヴァン君は」

「ああ、そうだな」

「私があそこで止めなかったら、殺していたでしょう？」

「だろうな・・・」

「ばかですよ・・・」

「ごめんな・・・」

そういってヴァン君はぎゅっと私を抱きしめてくれました。

頭1つほど身長の差があるので私は彼の胸に顔をうずめる形になります。

「ばかです・・・」

彼の確かな温もりを感じながら、私は微笑みました。

「好きだよ・・・シャル」

「私もです」

そして私たちの唇はふさがりました。

今までの、不安や、怒りを塗りつぶすほどに甘く優しいキスでした。

幕開け（後書き）

次からいよいよ動き出すゼッ。
しかし、主人公とヒロインのいちゃいちゃっぷりが正直目に余る。
いけるのか・・・？
Ｒ－１５も考えねばな・・・。

動き出す影。（前書き）

さて、そろそろいろいろと動き出します。

私もやります。やってみせます。

そんな感じの６話目です。

動き出す影。

俺は生徒会長に言われたとおり、7時に生徒会室にきていた。

正確にはつれてこられた、だが。

「失礼しまーす」

ノックもせずに入る俺にシャルは何か言いたげだったが、諦めたようにため息をついた。

「失礼します」

俺に続いてシャルも生徒会室に入った。もちろんノックをしていた。

俺が入った後なのだから必要もないと思うのだが。

「おはよう。ちゃんと来たわね」

「ええ、バッチリ起こしましたよ」

「やっぱり、シャルルちゃんを入れたのは正解だったわ」

しみじみとこぼす生徒会長。

「ちゃっちゃと用件をいってくれよ。こっちは寝みーんだ」

正直やってられない。この時間は寝てるからな、いつもは。

「はぁ、まぁいいわ。

貴方達の事だけれども、実際には生徒会に所属はしないことになるわ。エイジトール君という強力な戦力が入ったけれど、できるだけ隠しておきたいのよ。エイジトール君は先のダリウス家との一戦で、一応実力は知れているけど、それでも急に生徒会に入るというのは不自然。こっちの思惑を悟られてしまう可能性が高いわ。だから、私がシャルルちゃんに私的で協力を頼んで、それにエイジトール君がついてきた、ということになったわ。シャルルさんは学年主席だから、そんなに不自然ではないしね。と、いうことになったのだけれども、いいかしら？」

「私はいいと思います」

「ありがと。エイジトール君は？」

「俺は、知らん」

「・・・は？」

「俺はバカだからな。シャルがいいと言ったんならいいだろう」

「それでいいの？」

「ああ、俺はただ、シャルを守るために力を振るう。シャルはその矛先を導く。これで十分だ」

「ヴァン君・・・」

「シャル・・・」

うっとりと、その碧い瞳をうるませてこちらを見つめてくるシャル。

俺とシャルは生徒会長に見せつけるかのように、甘い雰囲気をかもし出す。

まぁ、シャルは完全に生徒会長のことは忘れて2人だけの世界に入っているから、見せつけているのは俺だ。

「何よ、その空気は！？話は終わったから、ちゃっちゃと出て行きなさい！」

顔を真っ赤にして怒鳴ってくる生徒会長。

いい気味だ、と笑いながら急いで生徒会室を出た。

「・・・・・・」

彼らが出て行った後、入れ違いになるように役員の子達が来た。

その子達は、自分の顔を見て驚いていた。

それもそうだろう、今の私は、それこそ普段ほとんど見せない『思考』している姿をしているのだから。

私は、自分で言うのもなんだが天才だ。

力に関しては、先代が『世界最強の五人（ファースト・オリジン）』だった事により上には上

がいる、ということを思い知らされたけれど、頭脳、知力や、頭の回転ということは、少なくとも同世代の中では一番だと自負している。

だからこそ、自分はほとんど『思考』というもの、今回は『長考』とでも言ったほうがいいかもしれないが、それをほとんどしない。

だから考え込む私、というものを見て驚いていたのだろう。

――――いや、まて。

（先代が『世界最強の五人（ファースト・オリジン）』だった？）

彼が、もしエイジトール君が『世界最強の五人（ファースト・オリジン）』だったら？

「・・・まさか」

そう思うが、ドンドン思考は進んでいく。

シャルルちゃんが詮索を禁止したこと。

彼が自分のことを道具のように扱っていること。

そしてなにより、彼の圧倒的なまでの力。

死を、殺しということに何の躊躇いもない、あの表情。

「・・・もし、本当にそうだったとしたら――――」

まずいことになる。

彼の、シャルルちゃんへの依存。

エイジトール君が、シャルルちゃんを失ったら――――

そう考えて、ぞっとした。

彼は間違いなく暴走するだろう。

彼という武器は、無差別に力を振るい、全てを破壊するだろう。

シャルルちゃんは、彼を導くだけではなく、鞘の役割もかねているのだ。

そんな彼女がいなくなってしまえば――――

「・・・会長？」

「・・・っ！」

かけられた声で我に返る。

「どうしました・・・？顔色が悪いですよ？」

「なんでもないわ・・・あるはずがない」

そうだ、あるはずがない。

彼が『世界最強の五人（ファースト・オリジン）』など、自分の作り出した、ただの幻想。
だが、手は打っておかないといけないかもしれない。
彼らのために。
なにより、自分自身のために。

―――

暗闇にはあどけのない声が響いていた。
「ねぇねぇ、カーヴァー」
「どうした？ラーヴァー」
声は二つ。
「そろそろ、だよ。カーヴァー」
「ああ、そろそろ、だな。ラーヴァー」
一つは少年のようで。
「馬鹿な奴等に思い知らせよう」
「「本物はどっちかをな」」

一つは暗く重い青年の声だった。

動き出す影。（後書き）

感想、叱咤激励、待ってます。

狂獣（前書き）

どうも。

いや～、この作品はどこに向かおうとしているんでしょうか？

そんな感じの7話目です。

狂獣

「うがあああああぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

一匹の獣が吼える。

憤怒と憎悪、そして悲しみに縁取られた、悲劇の咆哮。

どうして・・・

「があああああああああぁぁぁぁぁ！！！」

獣がまた吼え、その腕を振るう。

ただそれだけで、地形が変わる。

2時間前までは、切り立った山だったはずのそこは、もはや原形をとどめていなかった。

どうして・・・

「うあああああああああああぁぁぁぁぁっぁぁぁぁ！！！」

荒れ狂う獣が、吼えるたび、その腕を振るうたびに、周りは地獄と化していく。

私は、ただ呆然とそれを見ているだけ。

どうして・・・こんなことになった・・・？

「シャルウウウウウウウウウウッッッ！！！」

何も無くなったそこには、悲痛な叫びだけがこだまする。

ただ、一匹の獣が――――

ただ、憐れな狂戦士が――――

泣き叫んでいた。

――

「『ブローカー』の居場所が分かったわ」

そう、生徒会長に言われ、連れられてきた俺たち（もちろん俺とシャルだ）の前にはこの学園の周囲が記されている地図が広げられていた。

「奴等の隠れ家は・・・ここよ」

会長が指差したそこは、危険区域に指定されている山だった。

「ここは確か・・・5年前に特殊な毒性を持つガスが出てきた鉱山ですね」

「そう。少し荒れているだろうけど、隠れ家としては最適の場所よ」

「んで？どうすんだ？」

「2日後、ここを叩くわ」

「な！？正気ですか会長？」

「ええ。・・・大丈夫かしら？」

俺に確認を求めてきたってことは・・・

「俺が全部やんのか？」

「流石にそんな事はしないけれど、あなたが主軸になるのは間違いないわ」

「ちっ、めんどくせーな」

「で、どうなの？いけそう？」

「ああ、かまわねぇ」

「そう、ありがと」

「ハッ・・・いい迷惑だ」

「ヴァン君！」

う・・・しまった。シャルはこういうのに敏感だからな。

「いいのよ、シャルルちゃん。事実だもの」

「・・・作戦内容は？」

あわてて、会話をずらす。

「ええ、作戦内容は――――」

ボーンボーン

生徒会室に備えられてある古時計が６時を知らせていた。

「あら？もうこんな時間ね。今日はこれまでにしましょう」

その言葉で解散となる。

「ああ・・・エイジトール君？」

「んあ？なんだ？」

「少し話があるわ」

「ん・・・分かった」

「シャルルちゃんは悪いけど外で待っててくれる？」

「え・・・？はい・・・」

「悪いわね」

「いえ・・・」

そういい、シャルは出て行った。

「なんだ？」

「あなたたちのことよ」

「おれたちの・・・？」

「ええ。端的にいえば、今のあなたたちの状態は、はっきり言って危険よ」

「なに・・・？」

「あなたシャルルちゃんがいなくなったらどうする？」

「なにいってやがる・・・！」

「あつくならないで。大事なことよ」

「・・・くっ」

「いなくなるなんて事考えたことも無いんじゃない？」

「あたりめーだ」

「それが悪いとはいわないわ。むしろ信頼していていいと思うわ」
「なんなんだよ・・・」
「だけど、問題はそこなのよ」
「いいといったり、だめといったり、なんなんだてめぇ？」
「そうね。矛盾しているわね。でも、危険かもしれない」
「・・・・・・」
「無いとは思うわ。でも、一応忠告しておくわ」
――――依存するのは止めなさい。
「・・・っ！！」
「私の言いたいことはそれだけよ。もういいわ」

生徒会室からの帰り道。
頭を埋め尽くしているのは、会長のあの言葉。
『――――依存するのは止めなさい』

「・・・んだよ」
「？なにかいいった、ヴァン君？」
「いや・・・なんでもねぇ」
そうだ、なんでもない。
「・・・？」
「大丈夫だ。すこしつかれただけ」
「でも、会議中寝てたよね？」
「うぐ・・・っ」
「まったく、もう」
「ははは・・・」
いいじゃないか。
こんな平和をずっと望んでたんだ。
それに依存するなってのは無理だ。
それに、シャルは守ってみせる。
そのために力を付けたんだ。

守りたいものを守るために、俺は力を付けたんだ。

絶対に守ってみせる。

絶対に――――

――――――――――――――――――――――――――――

「うあああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁ・・・・・・」

間違っていたのはここからだったのだろうか？

いや、もっとずっと前から――――

おれは、弱かったんだ。

大切な物なんて守れない。

憐れな狂った戦士。

俺はただ、叫んでいた。

唯一つ（前書き）

書けない・・・だと・・・？
ネタがでねぇ。筆が進まん。
でも、後２０話は頑張りたいと思っていますので、まだまだ続きます。
失踪はしません頑張ります。
そんな感じの８話目です。

唯一つ

『ブローカー』の倒滅作戦が決行されたのは会議から2日後だった。

メンバーは俺とシャル、会長に副会長。

作戦内容は、まず俺を正面からぶつけ、混乱に乗じて頭を打ち残った奴等を一掃するという実にシンプルな物だった。

周囲には生徒会役員を展開し、万が一、逃げてきた奴等も逃さないようにしている。

そして俺という規格外の存在がいるのだ、怪我人も出るはずは無かった。

事実、途中まではうまくいっていた。

スムーズに、そして面白いほど作戦通りに『ブローカー』を一掃できた。

だが、捕らえた『ブローカー』の頭が発狂し、隠し持っていたナイフでもって縄を切り、逃げ出した。

それだけならまだ良かった。

しかし、それに当てられた他の奴等までもが暴れだした。

そして、その1人がシャルを人質に取った。

あろうことか、その男はその場でシャルを襲おうとしていた。
すぐに俺はそいつを吹き飛ばした。
しかし、注意が逸れたその一瞬で、副会長が動いた。
助けるフリをして近づき、シャルを魔法で貫いたのだ。

世界が止まった。

舞い散る血しぶきと、
崩れ落ちる彼女の姿。
とめどなく流れる鮮血が地面を染め上げ、
視界が真っ赤に染まる。
俺が覚えていたのはそこまでだった。

次に見たのは、荒れ果てた荒野と、そこに散らばる人間だった物。
無残にも引きちぎられ、押しつぶされ、残っているのは体の一部か、肉だけだった。
「・・・・・・・・・」
声が出ない。
俺はどうした？
何が起きた？
拙い思考で考えていると、ふと足元に何かがぶつかった。
それは、魔法で貫かれた彼女の姿だった。
それを見た瞬間、全て思い出す。
だが、出てくるのは全て悲しみだけ。
「・・・・・・うぅぅぅ」
声が出た。
「・・・うぅぅぅ」

それを声といっていいのかは分からなかった。

「うぅ、あああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁ」

もう何も残ってなどいない荒野で、悲しみだけが風に乗って消えていった。

あのあと、私たちは学校に回収された。

どうやら副会長は本当の『ブローカー』の頭だったようだ。

返り討ちにする算段だったんだろうが、失敗した。

シャルルちゃんを殺れば、彼を無効化できると考えたのだろうが、彼の暴走により全て殺され、アジトも無くなるという結果になった。

。

あの場で生き残ったのは3人。

私と、彼と、シャルルちゃんだった。

かろうじてシャルルちゃんは一命を取り留めた。

しかし、意識が回復することは無かった。

意識が回復するのは、奇跡でも起きぬ限り無理だといわれた。

負ったダメージが酷すぎたのだ。

彼は、ずっと彼女の側に居る。

最悪の結果になった。

あの時言った、彼の依存。

傍目には、普通の恋人同士にしか見えないが彼らに違和感があった。

何かは分からなかったが、忠告はした。

だが、それも無駄に終わった。

ただただ、生きているだけの死人と貸した彼の瞳には光が無い。

何も無かった。

「・・・・・・あなたは、もう、闘えないのかしら？」

私は、そっと目を閉じ、意識を闇に沈めた。

シャルが眠っている病室で、俺は絶望していた。

医者からつげられた言葉は、弱りきっていた俺の心を折るには十分だった。

ただ、寝ているだけに見える彼女が、もう起きないなんて信じられない。

あの太陽のような笑顔が、もう見れないなんて。

彼女の手料理もまだ食べていない。

出てくるのは後悔ばかり。

「・・・・・・こんなことなら」

こんなことになるのなら。

「・・・・・・出会わなければよかった」

俺のそばにいたから、彼女はこうなった。

それならば、出会わなければ良かった。

1年前のあの日、眠って無視すれば良かった。

彼女の告白を受け入れなければ良かった。

「・・・・・・なぁ、しゃる・・・？」

彼女は答えてくれない。

どれだけ呼んでも、かえってくるのは静寂のみ。

どれだけ手を握っても、握り返してはくれない。

どれだけ涙を流しても、拭ってはくれない。

夕日に照らされた病室で、誰かの鳴き声だけが静かに響いていた。

彼が泣いている。

私の愛しい彼が悲しんでいる。

でも、体が動かない。

行って抱きしめてあげたいのに。

それでも体は動かない。

『・・・・・・こんなことなら』

ああ、彼の声。

悲しみにくれた彼の声。

『・・・・・・出会わなければよかった』

そんなことはない。

私はあなたに逢えて感謝している。

あなたと共にいられて感謝している。

後悔なんて微塵も無い。

それなのに

それなのに、どうして

この体は動かない？

―――カミサマ

この気持ちを伝えたい。

―――彼に伝えたいのです

後悔などしていないということを。

――――私の愛しい彼に

出会えたことに感謝しているということを。

――――だから

私は、あなたを愛しているということを。

――――彼の元へ・・・！！

あなたと共に生きて生きたい。

私は、強く、強く願ったのです。

奇跡（前書き）

どうも。ｂｙとろです。

何か最終回っぽいけど違います。
まだまだ続くと思います。

そんな感じの９話目です。

奇跡

スティティレ魔法学校に俺が入学したのは、それが普通のことだったからだ。

『世界最強の5人』（ファースト・オリジン）であり、しかしその中でも特に規格外の2人。

あいつはずっと引き篭もっているからいいのだが、俺は外見は普通の少年。

怪しまれないためにも学校に行くことにした。

ちなみに校長が政府に顔がきく大物で、俺の入学の際、便宜してもらった。

そして、彼女とであった。

最初は仕方ないからだった。

でも、初日の放課後から自分の意思で学校に通うことにした。

今思えば、一目惚れ、というヤツだったんだろう。

実技で一緒のグループになったり、一緒に下校したり、休みの日には買い物に付き合ったこともあった。

毎日が本当に楽しかった。

俺が『世界最強の5人』（ファースト・オリジン）の、しかも化け物だというのに関わらず俺

を受け入れてくれた少女。
俺の人生に色をつけてくれた少女。
あの日、この少女を守ろうと決めた。
何があっても必ず守ると。
それなのに、どうして？
俺は、守れなかった。
前の俺なら相手が動いた瞬間に取り押さえることができたはずだ。
頼りきっていた。
あの子が側にいるだけで、浮ついてしまう。
彼女のいうとおりにだけ動く。
それで守れるはずが無い。
それはまさしく、彼女への依存が招いた悲劇。
俺は弱い。
なにが世界最強だ。
何が狂戦士だ。

目の前の1人すら守れないただのバカだ。

どこから間違ったのだろう。

いや、出会わなければ良かったのか。

目を開ければ放課後の教室だった。

俺以外には誰もいない。

1人、いた。

灰色の景色の中で唯一つ、色のついた人。

肩までの金髪に、澄み切った青色の瞳。

小柄の体とは対照的に育つ所は育っている。

彼女は帰る用意をしていた。

俺はただ座っている。

彼女が席を立つ。

それでも俺は座っている。

ここで声をかければ、巻き込んでしまう。

出会わなければ良かった。

声をかけるな。

かけてはいけない。

「・・・・・・どうして、泣いているんですか？」

泣いている？

ああ、そうだ俺は泣いている。

何故？

そんな事は分かりきっている。

「君が行ってしまうから・・・」

ぽつぽつと机に黒い染みができていく。

「それでいいはずなのに、出会わなければ良かったはずなのに、駄目なんだ」

静かに独白していく。

「出会わなければ君は怪我を負うこともなかった。君は幸せになれた。それでも、それでも俺は――――」

拳を握り締める。

言葉に。

この思いを言葉に。

「俺は、君と一緒に居たい」

「君と共に歩んでいきたい」

「自分の意思で・・・・！！」

そっと握り締めた拳に温かみが伝わった。

彼女の手が包み込んでいた。

「・・・やっと、言ってくれましたね」

「・・・ああ、随分と時間がかかった」

「それでも、言ってくれました」

「君は、後悔しないかい？」

「するわけ無いじゃないですか。だって、愛していますから」

「ありがとう。俺も愛してる」

「はい」

「一緒に生きよう。二人で支えあって」

「はい！！」

とびきりの笑顔。

手を取り合う。

その瞬間、世界に色が着いた。

そして温かさも。

笑いあう。

「「一緒にいこう」」

「「未来へ」」

世界がはじけていく。

恐怖は無かった。

手のぬくもりが残っているから。

――――――――――――――――――――――――

目を覚ました。

どうやらシャルのいる病室で眠ってしまったらしい。

「・・・夢、か」

さっき見たものはどうやら夢だったようだ。

「・・・はっ、都合の良すぎる夢だな」

「そうですか？」

「え・・・！？」

振り返ると、そこには彼女がいた。

優しく微笑んでいる彼女が。

もう聞くことがないと思っていた彼女の声。

もう見ることが無いと思っていた彼女の笑顔。

自然と涙がこぼれる。

「もう、泣き虫ですね。ヴァン君は」

「ああ、格好悪いかな？」

「そんな事は無いですよ。もっとヴァン君を知りたいです」

「俺も、シャルのこと、もっともっと知りたい」

「はい、ゆっくり時間をかけて知っていきましょう。時間はいっぱいあるんですから」

「ああ、ずっと傍で支えてくれるかい？」

「あたりまえです。私のことも支えてくださいね？」

「わかってるよ。支えあって生きていこう」

「はい」

「愛してる」

「愛しています」

抱きしめあい、唇を重ねる。

長く長く重ねあって、そして笑いあった。

ただただ、純粋に。

ただただ、幸せに。

創立謝祭　ｐａｒｔ１（前書き）

随分と遅れながら１００００ＰＶ達成～！

本当にありがとうございます。

これからも頑張って面白い小説を書けるよう尽力いたします。

どうか、見守ってやってください。

今回から少しほのぼのとします。

ノリで演劇にしてしまったけど大丈夫か？

いまさら不安になってきました。

そんな感じの十話目です。

創立謝祭　ｐａｒｔ１

ある洋館の一室。

赤い外套を手に持っている青年は、一枚の調査用紙を見ていた。

「ハッ、こんなとこにいやがったのか」

誰もが息を呑むほど端整な顔立ちをした青年は、やれやれと首を振った。

「アイツの存在はトップシークレットだし、下手に会いに行けねーな・・・どうしよ」

青年はしばし考え、ある答えにたどりついた。

「1ヵ月後の創立謝祭に、ゲストとして御呼ばれしよっかな？」

我ながらナイスアイデアだと自画自賛しているところに使用人が声をかけてきた。

そして二枚の写真が渡される。

「こいつは・・・」

先程とは一転し目を細めけわしい顔をする青年。

写真に写っていたのは一つは山で、一つは荒れ果てた荒野だった。

同じ場所から撮ったものなのだ。
たった3時間。
それだけで山を荒野に変えられるのはあいつだけ。
だが、あいつがやったとは考えられない。
アイツは超がつくほどのめんどくさがりやだからな。
普段なら、だが。
「暴走したのか？」
つまりは、そういうことである。
青年は歪んだ笑みを浮かべた。
「クハッ・・・さっきの案はやめだ。乗り込むぜ」
使用人は一応連絡は入れておきます、と部屋を出て行った。
「しかし、おまえが暴走して山一つで済むとは・・・弱くなったのか、それとも・・・」
後者であればいいと思う。
「クハッ・・・どちらにせよ行けばわかるか」
先程の使用人が帰ってきて、一つのトランクケースを渡す。

「いってくるぜ。たぶん2週間ほどだと思う。よろしく」

「はい。良い旅を、イグニ・リヒャルド様」

そういい、恭しく頭を下げる使用人にひらひらと手を振り、『紅星を背負う物(クロス・プロメテウス)』は炎となって消えた。

さて、2ヵ月後は創立謝祭ということでクラスの出し物を決めている。

当然俺は昼寝だ。

だが、こうもうるさければ寝ることができない。

やれ、メイド喫茶だとか

やれ、歴史研究だとか（あまりにも地味すぎだ）

お化け屋敷だとか、魔法ショー、賭けレース、ｅｔｃ・・・

「あの・・・」

おずおずと手を上げる少女がいた。

はい、シャルです。

「演劇がやりたいです」

演劇ねぇ・・・

いいんじゃない？

「お、いいじゃん」

誰かのそんな言葉を皮切れに皆がいいかもとか、やってみたいなとか、言い出した。

「それでは、演劇でいいですか？」

とのクラス長の言葉に全員一致でうなずく。

というわけで、演劇に決まったようだ。

「で、どうしてこうなった？」

あれから1週間。

どうにか台本が出来上がったのだが、問題は配役。

ちなみに内容（ストーリー）はこうだ。

人間と魔物が戦いを繰り広げていた。

やられればやり返し、血で血を洗う。

そんな中、人間の姫はいつ終わるとも知れない戦いを悲しんでいた。

共存の道はないのかと、来る日も来る日も文献をあさり、実地に赴き、何か無いかと考えていた。

そんな時、いつものように実地に赴いた姫を魔物が襲った。

何もなさぬまま死んでしまうのかと、死にきれないと悔やんだそのとき、次々と魔物が倒れていった。

そこにいたのは、人にあって人にあらず、魔であって魔にあらず、自らを魔人と呼ぶ少年だった。

彼こそが共存の突破口だと信じ姫は行動を開始する。

そして魔物をそそのかし国取りを行おうとしていた悪臣を倒し、魔物との共存を果たす姫。

しかし、悪臣の部下が姫を殺そうとする。

それを防ぐため姫をかばう魔人。
魔人は最後に、己の思いを伝え死んでしまう。
姫は、魔人の最後の言葉を胸に生きていく。

という感じ。
ハッピーエンドじゃないのか？
何か曖昧だな。
まぁいい。
そして配役。
姫・シャル。無難だな。
魔人・俺。
意味わかんねーし。
「あなたにピッタリなのよ」
知らないよ、そんなこと。

「それに一応最後にキスシーンを入れているのよ。あなた以外の適役がいないわ。それともなに？他のヤツとキスさせてもいいの？」

「いいわけあるか」

「なら、いいわね？」

「ぐ・・・わかったよ」

意外と黒いなクラス長。

名前忘れたが。

「アニーよ」

「心を読むな」

「顔に出てる」

まったく、今度から気をつけよう。

そういえば前のバカとの一戦で、学校中に俺とシャルの関係は知れ渡っている。

前のように落ちこぼれとも思われなくなったし、何か話しかけてくる人が増えた。

今ではクラスに打ち解けている。

人生なにが起きるかわかんねぇ。

「良かったですね、ヴァン君」

「めんどくさいがな・・・」

「ふふっ、たまには動いてください」

「ほいよ。がんばりましょうかね」

平和な日常がこれほど楽しいなんて知らなかったな。

「主役二人〜。はやくきて〜」

「いま、いきまーす」

それじゃあ、全力で楽しみますか。

現在(いま)を、な———。

創立謝祭　ｐａｒｔ２（前書き）

ギャグセンスがほすぃ・・・。

知識がほすぃ・・・。

そんな感じの１１話目です。

創立謝祭　ｐａｒｔ２

１０時３０分。

今日は日曜日、俺は学校から３キロほど離れたベルジュ街と呼ばれるところにいた。

服屋や、食事所などがある、いわゆるショッピングモールだ。

シャルと、創立謝祭の演劇でつかう小道具などを見に来たのだ。

とはいっても、見にきたなど建前で、言ってしまえばデートである。

シャルは別の用事でもうこの街に来ていて、１０時３０分に街の中心にある噴水で待ち合わせしていたのだ。

顔を上げて周りを見てみると人影が手を振っていた。

俺もそれに気づき手を振り返す。

「ごめんなさい。待ちました？」

「いや、今来たとこ」

男なら一度は言ってみたいセリフだ。

まぁ、寝坊したせいで、本当に今来たところなのだからすくいようはない。

それに気付いているのかシャルはそっと微笑んだ。

「・・・・・・」

正直に言えば、見惚れていた。

太陽を受けてきらきらと輝く金髪に、裾の方にフリルのついたシャツ。

これまたフリルのついたミニスカートから覗く白く健康的な足。

ふわふわした感じの中にある清楚な感じがシャルと合っていてとても可愛い。

「似合って、ませんか・・・？」

「そんなこと無い。似合ってる。可愛いよ」

「あ、ありがとう。ヴァン君・・・」

顔を赤くするシャル。マジ可愛いな。

「可愛いよ。・・・それじゃあ、行こうか」

「あ・・・は、はい」

手をつなぎ歩き出す。

今日はいい日になりそうだ。

「――姫様。人と魔族の共存など夢物語でございます」
「だから止めろとおっしゃるのですか？」
「そうでございます。もし、姫様の身に何かあったら――」
演劇の練習が進んでいる。
もうそろそろ俺の出番だ。
「キャアアアアアッ」
シャルの叫び声。演劇だと分かっていてもあまり気分のいいものじゃないな。
「そんな・・・こんなところで私はしぬのですか・・・？」
「グるるるるうううおおおお・・・」
いや、獣の声の真似上手すぎだろ。あ、きぐるみの中はヨッシーダ君か、素直に尊敬できるな。
「私は、まだ・・・こんなところで死ぬわけには行かないのです・・

・！！」

よし、俺の出番だな。

ステージが暗くなる。

その瞬間、一歩踏み出す。

ステージが暗くなるのは一瞬だ。

その一瞬に、ステージ中央にシャルと向かい合う形で移動する。

ステージが明るくなった時には獣が倒れ、剣を携えた俺がたっていた。

「――――問おう。汝が心のありかを」

「いやー、あそこまで役に合うとは思って無かったわ」

劇の練習が終わり、放課後。俺たちは劇について話していた。何故かクラス長も混じって。

「そうですよね！ヴァン君かっこよかったですよね！」

「かっこいいなんて一言も言ってないのに、脳内変換されるなんて！このバカップルが！」

「シャルも可愛かったよ」
「ありがとう、ヴァン君」
「無視ッ！？ナチュラルに無視されたっ！」
「無駄だよ。シャルゥとヴァンっちは、正真正銘のバカップルだから」
「あ、リンちゃん。町娘の役、とっても上手かったよ」
「や～や～、ありがとう。可愛いなぁ、こいつめ～」
「無視されるのは私だけなの！？」
シャルのほっぺたをつつき始めるリンを尻目にみかんを食べる。
「お、みかんうまいな」
「何でみかん食べてるのっ！？」
「もってきたからに決まってるだろう？」
「なんでもって来てるのかを聞いてるのよ！しかもダンボールで！」
「おいしいから？好物だから？」
「おいしいけどもっ！何でダンボールごともってきてるの！？」
「おいしいですよねみかん」

「だよなぁ。さすがシャル」

「一つ貰ってもいい？」

「おっけー、おっけー」

「あ、私もー」

「何で私を無視して会話が進んでるのっ！？いじめっ！？いじめなのね！？」

「うるさいな、みかん食って落ち着けよ」

「あ、ありがと・・・じゃなくて！うるさくさせてんのはあなたでしょ！？」

「この後どうする？」

「だからどうして会話を再会するのよ～！」

この日、ある女子生徒の声が何回も校舎に響いていたという。

「何かもう終わろうとしてるしっ！？」

「なに、言ってんだ？」

「ヴァン君・・・そっとして置いてあげよう？」

「何で私がかわいそうな子になってるのよ！」

「あ～、まぁ俺は、ほら中二病とか、電波とかも個性だと思ってるから、なぁ？」

「何て苦しい！ていうか、私は残念な子じゃないわよ！」

「元気・・・出せよ。これから治していけるからさ？」

「だから違うって～～～～～～！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6441x/

私と彼の恋物語

2011年11月24日19時55分発行